

研究所とのNet Work

所報

Aichi Labor Institute

もくじ

・武漢・南京市民との交流のたび ……本多 弘司 p~2

・再びたびたび橋下現象（ハシズム）と格差社会について
「ねつ造リスト」問題を中心に ……櫻井 善行 p6~

・シリーズこの一冊 浅野智彦著
「若者の気分・趣味縁から始まる社会参加」 ……長沢 孝司 p8~

・トヨタ・世界首位奪還、生産が過去最高へ ……伊藤 欽次 p10~

・原発ゼロ・自然エネ・省エネ社会へ ……近森 泰彦 p16~

・行ってみよう近くの穴場・名古屋「古書展」 ……編集部 p18~

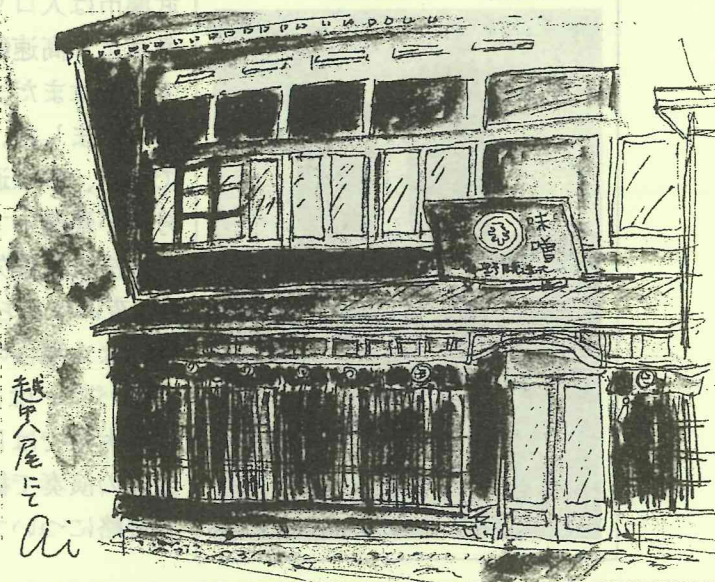
・あなたに役立つ情報発信 ……編集部 p19~

・追悼！水野貴紙志彦さん ……櫻井 善行 p20~

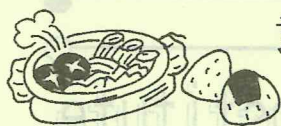
—生涯労働者研究者の死を悼む—

・詠み人知らず ……編集部 p23~

・編集後記



● 第164号特別号
○ 2012年5月15日



武漢・南京市民との交流の旅

本多 弘司

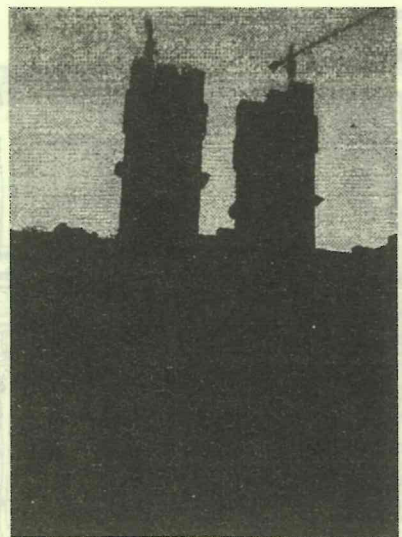
河村市長の「南京虐殺はなかった」という発言を聞いて、再度南京を訪ねることにしました。日中友好協会愛知のツアーに、3・24～3・29の参加です。虐殺記念館へ5年前に行った時は、改修工事で見学できなかったことも参加の理由です。現地に立ち、民間交流し、本を読み、中国侵略戦争の背景を考えるきっかけにしたかったからです。戦争を知らない世代も増え、戦争責任を曖昧にしようとする動きがあります。

南京事件は、「なかった」、「まぼろし」などという人もいますが、自国に都合の悪い過去の歴史を見ない、自己都合的な政治的思惑からの発想だと思います。その論点には、30万人も殺せないという数の問題にすり替え、戦争だから軍人（敗残兵、便衣兵）を殺したのは「違法」でないとかです。戦闘時期、エリア、人口などの定義の問題、証言、資料、戦争の時代背景など再学習するテーマです。

虐殺から日本軍占領が8年も続き、古くて資料など完全でないものがありますが、虐殺を否定することは真に平和と友好を否定するものです。二大政党の政策に失望している世論を背景に、マスコミを活用した河村・橋本流のポピュリズムとファシズムの動きを見過ごせません。

成長発展を続ける中国も色々な課題を抱えています。今の成長はいつまで続くのか、格差や汚職問題はどうか、自動車関連の進出企業の動き、大都市の変化と市民のくらしなど興味はつきません。武漢と南京の大都市、特に南京大虐殺記念館など駆け足での見学でした。予備知識も少なく、中国の歴史認識も不十分ですが、武漢大学との学生交流と南京虐殺について、私の感じた思いを書き記しました。

<武漢大学の学生と交流>



武漢市は人口910万人の大都市で、長江流域に南京より高速鉄道で4時間ほどの上流にあります。街はまだ再開発など建設ラッシュが続いていました。道路は片側3～5車線と広いのですが、車は通勤時に大渋滞です。地下鉄も2号線が建設中ですが、公共鉄道の遅れは車社会と経済成長優先で、都市計画が後手だと思います。夜にはあちこちで40～60代の女性が、太極拳でなく現代のダンスを数十人でしていました。女性パワーはここでもエネルギーギッシュでした。武漢大学では日本語学科の学生と交流し、歌と楽器の演奏で歓迎されました。南京大虐殺、中国侵略について公式見解を、団長が発表しまし

た。その後グループ討論をしました。5人中3人が日本のアニメから、日本に興味を持ったそうです。日本に留学希望が2人で、日本語は中学1年から習い会話には不自由がありませんでした。まだ誰も日本に行ったことがないそうです。

中国に何回来たことがあるかと聞かれました。長春（旧満州）、敦煌、兵馬俑、蘇州、南京、シャングリラ～昆明、紹興、上海と今回で私は10回程です。広い中国で複数の都市は、上海と南京だけです。武漢をどう思うかと聞かれ大都市は個人的には好きではないが、観光地や公共施設でトイレが綺麗になったこと、建設ラッシュが続いていて交通渋滞が多く公共交通が不足していること、中国はもはや先進国になっているから、COP17など環境基準を守って欲しいことや、都市の成長管理をする必要を述べました。日本での地震の心配も聞かれました。原発はまだ収束していないが、中国も日本も原発を0にしていましょと発言しました。

本音での民間交流は有意義なもので、勉強になりました。終わってバスを待っていると、交流した学生が「先程はありがとうございました」と、丁寧に挨拶をしていき、礼儀正しさにも感激しました。武漢大学は総合大学で1学年が8,000人程で、教職員など含め数万人の学園都市となっています。まだ咲いていませんでしたが、桜の名所でもあります。写真はスクラップアンドビルドの続く武漢の街です。

<虐殺は30万人か、まぼろしか>

南京虐殺記念館が作られたのは、1982年日本の文部省が中国への戦争を、侵略から進出に教科書を書き換えようとした動きが発端で、記録と記憶を残すためでした。他の都市でも戦争記念館が作られたようです。

30万人も殺せる訳がないから、やっていないなど数の問題にすり替えようとする人もいます。中国人ガイドの説明によれば、

- ① 体埋葬記録があり、これが18万5千、②家族などの自己埋葬3万5千、③日本軍の処理（焼却・埋葬、川への投棄）と、併せて30万人です。

日本軍が南京侵攻の前に、中国軍は突如南京を放棄し逃げてしまった。城壁の面積は東京の山手線の内側ほどある。人口は100万人ほどいたが、半分は避難したが上海などから逃げて来た人、取り残された軍人で60万人を超える。（アイリス・チャン「ザ・レイプ・オブ・南京」など中国側主張）東京裁判の判決書では26万人以上と結論づけられています。

1937年12月13日に南京が陥落し、それから6週間で多くの殺害、焼き討ち、盗難、暴行が行われた訳です。難民区に20～25万人ほどいました。これを根拠に南京市の人口を30万人以下とする人もいます。南京の城郭内、スマイス調査など根拠に、秦は虐殺数約4万人としています。難民区にいた外国人の記録もありますが、部分的なものです。ジャーナリストの報道もありますが追放されました。期間と地域をどうとるかによって、数は異なって来ます。日中政府による「日中歴史共同研究」で数の点には違いがあります。そこでは「日本軍による捕虜、敗残兵、便衣隊、および一部の市民に対して、集団的、個別的な虐殺事件が発生し、強姦、略奪や放火も頻発した」と認

めています。公職にある河村市長は、根拠もなく虐殺はなかったとなど軽々しく言えるものではありません。

<敗戦後父親が親切にされた>

河村市長は①南京市に30万人も人口がいなかった、②父親が中国で戦後親切にされた、③通常の「戦闘行為」であったことが、南京大虐殺はなかったという理由です。

数の問題は前に述べた通りです。日本の敗戦後、中国人に親切にされたことで、日本の侵略や南京虐殺を否定できるのでしょうか。中国のガイドによれば、いじめられた日本兵を中国人が攻撃しなかったのは、①日本は敗戦し、国際法がある、②日中戦争にアメリカ、ソ連が参戦した、③戦後の蒋介石の敵は中国共産党だから、ということでした。中国人から言わせれば、やさしくされたからといって、日本が中国に侵略した歴史的事実を否定するのは、恩を仇で返すようなものです。

<日本を中国が攻める理由がない>

「中国は侵略の歴史がない」。これは南京の旅行社Tさんの説明でした。言われて見れば、なるほどとうなずけます。日本が中国に一方的に口実をつくり、侵略した戦争を忘れています。ガイドの説明では、中国が日本を攻める理由がないことに、①日本には資源（鉱物）がない。アメリカが中東戦争を起こすのは、石油権益の確保である。

②万里の長城など城壁は、他国からの侵略を防ぐ防衛であった。③朝鮮戦争もベトナム戦争も、中東戦争でも日本はアメリカの後方支援の役割を果たし、戦争を遂行した。

④日本が原発に熱心なのはプルトニウムができ、核兵器にすぐ転用できるからである。

（非核三原則は国会で決議されても法制化していません。武器輸出三原則も緩和の流れです。）するどい指摘です。

①の資源については、尖閣諸島の問題や中国漁船の領海侵犯の問題はあります。歴史を学び、武力や抑止力より、話し合い、民間交流の大切さを実感しました。

<上海から南京攻略と日本軍>

もともと南京攻略が任務ではなかった上海派遣軍の独断に、中央が引きずられる形で苦戦した上海戦から、南京戦へのなほ崩壊的な拡大が起きました。参謀本部の石原は、ソ連戦を考え不拡大派でした。補給のための編成が不十分であった日本軍は、給養の徴発という名目の現地略奪を断続的に行い、その過程で婦女への強姦殺人等、現地の住民への残虐行為が頻発しました。1937年12月1日正式の南京攻略命令が出ると、まもなく日本軍は南京市の城壁、門を包囲し、攻撃し12月13日に陥落しました。

中国軍は首都南京を死守の予定が、攻撃直前に撤退に変わり混乱しました。残された兵士も沢山いて、武器と軍服を捨てた兵士もでました。難民区に逃げた人もでました。国際法も無視し、敗残兵の掃討、投降兵・捕虜・「便衣兵」の組織的虐殺、非戦闘員への残虐行為が頻発しました。それらは、その後の占領下でも継続したのです。「南京大虐殺または南京アストロシティーズ（南京残虐行為）」といわれている事件は、①

捕虜の集団殺害、②敗残兵てき出という名で行われた兵士や市民の処刑、③女性への強姦致死を含む一般市民への残虐行為を総称したものである」(藤原)。事件の背景に藤原は、「軍の素質の低下」、「軍紀風紀の頹廃」をあげています。日本は中国に戦線布告していない、赤紙一枚で遠い戦地へ駆り出され、大義名分のない戦争で、軍人の志気が上がらないのは当然でしょう。

<南京市の繁華街>

最終日前日に、南京での宿泊ホテルへ帰ったのは、午後9時頃でした。ホテルの近くがネオンで明るく夫子廟街とあり、街歩きに一人で出かけました。夜の照明も綺麗で、遅い時間でも大変な賑わいでした。科挙の試験の歴史館もありました。試験がなぜ廃止になったのか、説明では公正に行われなくなったからとありました。翌日は南京から上海へ新幹線で、約4時間です。昼食をとり空港へ向かいましたが、なんと天候のせいで機材が届かず飛行機が飛びません。急遽航空会社のホテルに足止めされました。携帯からすぐに国際電話ができるのも便利な時代となりました。旅行中は天候に恵まれ食事もおいしく、歴史を学ぶ貴重な旅も最後に「ケチ」がつかしました。

翌日の空港で出国手続きに並んでいると、私の前に日本人が同じツアーのメンバーを割り込ませようとしていました。そこで中国の警備の人が、“hello”と一言、後ろへ回れと指示してくれました。上海オリンピックの効果か、マナーが悪いのは日本人でした。

河村発言をきっかけに、戦争の悲惨、歴史を学び、平和・友好の未来を展望し、文献・資料を読み、引き続き解明したいと思います。「南京事件」の文献は沢山あります。

私も読みかけのものもありますが、一部を掲載します。みなさんも現地に赴き、文献を読んでください。まずは、藤原「南京の日本軍」、笠原「南京事件論争史」、秦「南京事件」などお勧めです。コメントがいただければ幸いです。

参考文献

- 本多勝一(1981)『中国の旅』朝日文庫
南京事件調査研究会編(1997)『南京大虐殺否定論13のウソ』柏書房
藤原 彰(1997)『南京の日本軍』大月書店
稲垣大紀(2006)『25歳が読む「南京事件」』中央公論事業出版部
チャン・アイリス(2007)『ザ・レイプ・オブ・南京』同時代社
笠原十九司(2007)『南京事件論争史』平凡新書
秦 郁彦(1986、2007増補)『南京事件』中公新書
姜尚中・小森陽太郎(2007)『戦後日本は戦争をしてきた』角川 one テーマ 21
加藤嘉一(2011)『われ日本海の橋とならん』ダイヤモンド社

(ほんだ・こうじ/研究所所員)

再び、みたび橋下現象(ハシズム) と格差社会について 「ねつ造リスト」問題を中心に



櫻井 善行

橋下現象(ハシズム)の危険な本質が日々あらわになっている。橋下・維新の会は最近も、「家庭教育支援条例(案)」なるものを出してきたが、多くの人はその文章を見て、嘔然とした。現在の子どもたちの否定的な現象はすべて家庭にあるという、復古主義的家族観のもと、不登校に限らず学習障害や発達障害児などの出現は家庭に問題ありという驚くべき主張を平気で行った。さすがにこの条例については多くの団体から批判・非難が集中し、橋下・維新の会はこの条例案をすぐに引っ込めるに至った。度重なる不祥事である。

政令市の自治体の長たる者が、自分が代表を務める会派がこうした反社会的条例を出してきたということは、自らの進退に関わる大問題であるが、橋下は例によって、無責任にも「ぼくしらなかった」といって火消しに躍起である。橋下・維新の会は、「違法アンケート」も、「君が代ロパクチェック」も自らが任命した「部下」の不祥事であるにもかかわらず、その不祥事を何ら「問題はない」とかばい、正当化してきた。他人には厳しく、身内には甘い本性をあらわにしてきた。橋下徹は上司としての資質以前の、人間性に問題がある。ただ今回は、挫折したが、いまだに多くの人が、いまだにその橋下に期待をしている現実とは異常そのものである。その役割を担っているのがメディアである。「橋下総理待望論」などの記事が溢れている。ちょっと待ってくれよ、どうしてあんな最低の「イカサマ・はったり」の人物に喝采するのだといったくなる。

違法アンケートの発端になった、「ねつ造リスト」はすでに報道されているように、大阪市役所の32歳の非正規(嘱託)職員であった。この事件はすでに過去の問題化のようにメディアはもう騒がないようになったが、私は現代日本の格差社会の本質を示すものとして重要な意味をもつと考える。今一度この問題について整理考察しながらその意味を考えて見よう。こうした事件はこれからも、再発する可能性があるからである。

このリストは捏造を行った非常勤職員が実は内部告発者と同一人物であった。市議会でこの「内部告発」を公表した杉村議員とは以前から面識があり、維新塾にも応募していたという。杉村議員は真偽のほどを精査しないまま、市議会でこの件を公表し、橋下市長とともに議会で大阪市交通労組を激しく批判していた。ありもしない濡れ衣をかぶせ、「迷える子羊」への扇動を行い、これを契機にあの「違法アンケート」が始まったのだから、杉村議員と橋下市長はこの責任を負うのは当然である。彼らがいつも言う「民間ならクビですよ」という言葉を、彼らに贈りたい。彼らこそ既得権益に保護されているのだ。

この事件は、「ねつ造」した本人が悪いのはいうまでもない。次にこのねつ造文書本物だと信じ込んで、市議会でまじめくさって追及した杉村議員のお目出たさを批判するのは当然である。しかも、この議員の市政調査能力の欠如を批判するのではなく、それをかばい続ける橋下市長はもっと非難されるべきである。前原民主党の時代に、「ホリエモンー武部勤」偽メール問題で国会で追及した時、それが偽メールとわかったとき、前原代表は辞任し、当時の永田議員は辞職し、後にうつになって自死したのは悲しい出来事であった。今回の事件はそれ以上に重みがあり、当事者の非正規職員の解職ですべて決着させようとする橋下・維新の会の無責任さを非難する人は多い。

ここまでの論調はいまでもよく見受ける。私が重要視したいのは、この謀略の担い手が、若い非常勤の職員であったということである。彼は、この格差社会で負け組と言われているそうである。32歳で嘱託職員という恵まれない処遇で、しかも上昇志向があったのかはわからないが、維新塾に応募している。メディアなどの情報によれば、彼は大阪市交通労組への嫌悪と維新の会への期待を持っていたようである。だから彼は、維新の会のメンバー（議員）とも交流し、自ら維新塾に参加しようとしたのであろう。彼は今の若者の中に根強くある、「労働組合は既得権益の集まりと社会発展の癌」という考えをそのまま受け入れ、その労組を激しく叩く「橋下・維新の会」に共鳴して、自らねつ造文書を作成して、維新の会のメンバーに提供したのであろう。橋下は、杉村議員はかばったが、彼嘱託職員は切り捨てられた。哀れみを誘う事件である。

現在の橋下現象（ハシズム）に期待する若者たちの多くは、就職氷河期以降に社会に出た層であり、まともな職に就けなかった人が多い。「民間なら、とっくにクビ」というように、今なお、ルールが守られていない職場で働いている人が多い。ロスジェネと言われる彼らの世代が、労働組合や公務員を激しく攻撃する橋下現象（ハシズム）に共鳴するが、橋下・維新の会はそれでは非正規の人たちの処遇改善や保護をどうするかは全く言っていない。すべて自己責任で解決すべきであるという主張であることに気がついていない。いつかは気がつくとは思いますが、橋下・維新の会になびいている人は残念ながらその事実には気がついていない。それは彼らは、自らの未来を切り拓くのは他者との連帯・団結が不可避であり、身近なものへのジェラシーではなく巨悪に目を向けていくことに気がついていないからである。

もう一つは、日本では労働組合の力が決定的に後退してきたことであり、多くの若者の苦難に応えるべく役割を果たせていない。だからといって、この現実から目を背けることがあっていい訳ではない。歴史は紆余曲折があっても必ず、前に向かっていくのだという気持ちだけは忘れてはいけない。

（さくらい・よしゆき／ 当研究所事務局長）

シリーズ・この1冊

浅野智彦著『若者の気分・趣味縁から始まる社会参加』

— 岩波書店 2011 年 —

長沢 孝司

かつて高度経済成長の後期に、労働組合をはじめ階級的・民主的運動の高揚期を経験された方々のご存知のとおり、その底辺に、青年を中心とする「うたごえ」サークルや各種スポーツ、登山など、多様な趣味サークルの広がりがあった。実際、サークルという言葉自体、民主的運動体の創造によるものであり、サークルへの参加を通して社会・政治問題に覚醒した人が多かった。サークル活動と社会活動が結びついていることは、経験的事実として共有された認識になっていたと言ってよいだろう。そしてそうした車の両輪とも言える活動を通して、首尾一貫したアイデンティティを確立していったのであった。

だが今日、経済・社会状況は大きく変化し、それに伴って人々、特に若者の価値観と生き方も大きく転換している。社会的なつながりを失った「無縁社会」とか「孤独化」が進行し、若者は時と場所によって異なった顔（姿）を使い分ける「マルチ人間」化したというのが、社会学では大方の捉え方である。

著者は、現代の若者にこうした危険性が潜むことを否定はしない。だが、今日の若者をさらに深みに降りて理解すれば、そこには若者が社会に目を向け、活動に参加する可能性が醸成されていることも事実ではないか、その現実を捉えようとしたのが本書である。著者は、若者の置かれた苦しい客観的現実を踏まえつつも、それを突き抜けて社会変革の主体として登場する道筋を捉える試みである。その場合、氏は、社会活動とは最もかけ離れて見える「オタク」という「趣味縁」集団を、あえて切り口としてとりあげる。流暢で的確な文体とあいまって、読者を一気に引きつける内容である。以下、順を追ってその概略を紹介しよう。

まず、「1、社会参加・公共性・趣味縁」において、著者はいくつかのアンケート調査をもとに、今日の若者が孤立してきているのではなく、友人を求め、また友人関係が増えていることを確認する。しかも彼らは、自己という存在は、最初から絶対的な個人としてあるわけではないことを認識しており、様々な「友人関係あつての私」として、諸関係の中ではじめて存在しうる私なのである。その意味で彼らは「関係志向的」である。氏はこうした現代若者を「ウェブ的自己」と呼ぶ。

そしてこの「ウェブ的自己」は、「多元的」となる。すなわち、「その都度の関係の文脈をよく理解し、それに合わせて自己を提示していこうとする傾向を発達させる」のである。それはその都度「仮面」を見せるということではなく、「ある場面では、自分のある側面を強調して打ち出し、別の場面では別の側面を強調する」ということで

ある。

現代の若者をこのように捉えたうえで、次の「2 社会関係資本としての趣味縁」の発達的な意義を考察する。すなわち「趣味がなぜ異質な人々をつなげる効果を持つのか」という本題に入る。氏によれば、まず趣味の世界では、外の世界にある上下関係や生活環境の異質性を無関係にすることによって、共通の土俵を作る。その上で、その趣味の世界においては、相互の葛藤が生じるが、趣味への愛によって克服され、またその趣味への力量への敬意による承認関係がはぐくまれる。だから、「オタク」の若者はみな謙虚である。さらにその上で、互いの目的を共有し、それを達成するための諸条件を整え実現するという協力関係が生まれていく。それはとりもなおさず、社会性の獲得過程であり、時としてその力は、社会に向けての示威行動となって表れる。

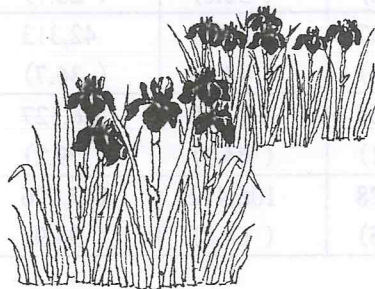
次の「3、趣味縁と社会参加、その歴史」は、江戸時代、そして戦後において、趣味と社会参加がどのような関係にあったか、またそれがどう理解されてきたかが紹介されている。興味深い内容だが、ここでは紙幅の都合上、略しておく。

そして最後に、「4 趣味縁の潜在力とは何か」が分析される。この章は、氏の問題意識に沿って、東京杉並区で若者へのアンケート調査を分析したものである。その結果の要点は、自発的な趣味集団への参加は、カンパや署名などに協力的な傾向を示しており、とくに集団所属が単一ではなく複数になるとその傾向がはっきり出ているということである。おそらく、それだけ社会的な力が身についているということであろう。

氏も認めるように、最後の調査分析はなお継続的に深める余地があろう。だが、趣味活動がかくも広がりを見せている今日、それを単なる個人的問題と切ってしまうのではなく、社会参加や社会変革との内的連関をとらえようとする氏の旺盛で鋭い問題意識は高く評価されよう。今日の若者論に新たな地平を開いたものとして共有したい1冊である。

(ながさわ・たかし／ 当研究所副所長)

調査項目	調査項目	調査項目	調査項目	調査項目	調査項目
22,802	557,422	200,17	512,12	552,22	甲 1195
(2.52)	(2.49)	(7.05)	(0.55)	(0.15)	月 4
118,785	457,051	24,54	1,701	1,701	月 2
(7.02)	(2.42)	(7.02)	(0.14)	(0.14)	月 8
928,532	957,442	557,422	557,422	557,422	月 8
(8.09)	(4.89)	(4.89)	(1.49)	(1.49)	月 7
418,402	285,552	285,552	285,552	285,552	月 7
(9.17)	(2.89)	(2.89)	(2.89)	(2.89)	



トヨタ・世界首位奪還、生産が過去最高へ

2013年3月期決算予想、1兆円の見込み



伊藤 欽次

1. 猛烈な生産挽回、2011年度の国内生産4年ぶり前年度を上回った

トヨタが4月25日発表した「2011年度の国内生産」は前年度比3.9%増の311万9709台と、4年ぶりに前年度を上回った。

上期は東日本大震災の影響で大幅な減産を余儀なくされたが、12年1～3月期には新型小型ハイブリッド車「アクア」を投入したほか、生産を回復したことで盛り返した、というのです。

海外生産は中国などアジア市場が牽引（けんいん）し、1.7%増の440万9984台でした。

国内販売は「レクサス」ブランドの好調などで0.4%増の141万2999台で2年ぶりに前年度を上回ったという。

12年3月の海外生産は、21.3%増の50万892台で、4か月連続で前期を上まわり、単月としても過去最高を記録した。これは、アフリカ・アジア・欧州・中南米・北米等で増加していることが理由といわれている。

なお、国内生産は36万4928台（同181.8%増）で、8か月連続の前年同月比増となった。国内販売実績は23万6405台（前年同月比105.2%増）となっており、7か月連続で増加している。

国内・海外をあわせた世界生産は86万5820台（59.6%増）となっていました。猛烈な生産の「挽回」ぶりでした。

この1年の推移をみると、その道のりは平坦なものではなかった、といえる。

	国内生産	国内販売	輸 出	海外生産	グローバル生産
2011年	53,823	37,332	31,025	254,732	308,555
4月	(21.6)	(32.0)	(20.7)	(74.5)	(52.2)
5月	107,437	50,597	42,313	180,374	287,811
	(45.6)	(44.3)	(36.7)	(54.2)	(50.7)
6月	249,660	91,568	126,127	344,179	593,839
	(84.1)	(64.3)	(79.2)	(96.4)	(90.8)
7月	262,328	106,412	147,096	332,286	594,614
	(87.5)	(64.8)	(94.9)	(99.5)	(93.9)

8 月	252,374 (111.9)	102,443 (77.3)	137,977 (119.8)	374,443 (109.8)	626,817 (110.6)
9 月	309,389 (101.2)	137,174 (102.5)	180,566 (121.3)	425,631 (116.1)	735,020 (109.3)
1 0 月	316,597 (133.5)	128,485 (123.9)	189,304 (131.9)	380,842 (101.3)	697,439 (113.7)
1 1 月	276,852 (105.1)	126,282 (127.7)	148,925 (100.5)	357,613 (90.9)	634,464 (96.6)
1 2 月	284,477 (116.7)	99,542 (125.2)	169,366 (101.6)	374,957 (106.6)	658,534 (110.7)
2012 年	295,630	130,608	133,941	419,335	714,965
1 月	(126.3)	(149.4)	(106.2)	(110.4)	(116.5)
2 月	346,215 (122.1)	166,151 (140.2)	184,179 (113.4)	465,095 (132.3)	811,310 (127.8)
3 月	364,928 (281.8)	236,405 (205.2)	179,998 (167.0)	500,892 (121.3)	865,820 (159.6)
累計	3,119,709 (103.9)	1,412,999 (100.4)	1,670,818 (98.4)	4,409,984 (101.7)	7,529,693 (102.6)

「トヨタが世界首位の座を奪還できたのは、生産・販売の基盤を新興市場中心に転換し、世界的にマーケティングを強化しているためだ。これはトヨタが最近まで大規模リコール、世界経済の低迷、東日本巨大地震、タイ大洪水、円高など複数の悪材料に直面したにもかかわらず、いぜんとして強い競争力を備えていることを示すものだ。」と、高い評価が寄せられている。

2. 2012年3月末決算・予想外の成果.

5月9日、トヨタは2012年3月期決算を発表した。

売上高、営業利益などは、前期(2011年3月期)より下回ったとはいえ、東日本大震災によるながびく生産停止・減産を、後半の猛烈な「挽回生産」で、売上高をほぼ前期に追いつくという猛烈ぶりであった。

海外生産も北米、アジアなどで順調であったことが、予想外の成果につながったとみられている。くわえて、昨年秋の急激な円高が一股状況も、好決算につながったとみられている。

だが、見落としとしてはならないのは、**1500億円のコスト削減**が利益を押し上げたことである。

また、営業利益は減らしたものの、内部留保の主要部分である「**利益剰余金**」は、**11兆9170億円**を計上。前期比で **814億円**余りを積み増しています。

連結決算要約

7

(単位:億円)

	当期 2013.12	前期 2012.12	増減	増減率
売上高	185,836	189,936	△ 4,100	△2.2%
営業利益	3,556	4,682	△ 1,126	△24.1%
税金等調整前 当期純利益	4,328	5,632	△ 1,304	△23.2%
当期純利益*	2,835	4,081	△ 1,246	△30.5%
為替レート	ドル	79円	86円	7円の円高
	ユーロ	109円	113円	4円の円高

*当社は株主に帰属する当期純利益

TOYOTA

トヨタが予想外の成果とは言え、日産やホンダと比べて、優位に立っているとは言えません。

単位:億円

	売上高	営業利益	純損益
トヨタ	185836 (▼ 2.2)	3556 (▼24.1)	2835 (▼30.5)
日産	94090 (7.2)	5458 (1.6)	3414 (7.0)
ホンダ	79480 (▼11.1)	2313 (▼59.4)	2114 (▼60.4)

() は、前年同期比増減率%、▼はマイナス

3. 今期決算、利益1兆円を見込む

しかし、注目されたのは、今期決算見込みであった。決算発表と同時に、**2013年3月期の連結営業利益**（米国会計基準）が**前年比2.8倍の1兆円**になるとの見通しを発表した。

前期は東日本大震災やタイ洪水の影響で供給不足となったものの、今期は生産が正常化し、主要地域で販売台数を伸ばす、との予想のようである。

都内で決算会見した豊田章男社長は、「持続的な成長にのってきた」と述べ、**「安定的安定的に収益を上げられる構造ができつつある」**ことを強調していた、という。

マスコミ報道は、この「1兆円利益」にはさほどの驚きをみせていなかった。過去最高だった08年3月期の2兆2700億円にはほど遠いが、それでも「V字回復」

には違いない。

他の自動車メーカーも同じであるが、追い風になっているのは、①大震災や洪水からの生産正常化、②円高修正、くわえて、③エコカー補助金の復活、であった。

なんと言っても大きいのは、「円高修正」であろう。

対ドル円相場は、11年10月、1ドル＝75円と、過去最高値をつけたが、年明け2月から円安トレンドに転じ、一時は83円台まで安くなったことである。

トヨタの場合、1円円高で、320億円の営業減益となる実態を考えると、為替変動は無視できないものとなっている。(5月14日現在、為替相場は対1ドル＝80円台)

4. 海外生産が6割を超える計画

5月9日に明らかにした2012年度(2012年4月～2013年3月)の生産計画は、海外生産が初めて6割を超えます。

年ねん、海外生産を増やし続けてきたトヨタですが、「多国籍企業化」はいっそうすすみます。

計画によると、2012年度の生産計画は870万台です。このうち海外が6割の530万台となります。08年度の371万台から1.4倍です。

昨年夏以来の1ドル70円台半ばの超円高のもとで、海外生産をいっそう加速させる戦略といえます。

実際、国内で生産し海外に輸出していたカムリやハイランダーなどを、アメリカで生産し輸出する動きが出ています。国内の雇用を守るには300万台の生産が必要といわれています。

豊田章男社長は、「300万台を死守する」といいます。この間は、国内生産は300万台で推移していますが、海外生産シフトの流れは変わらず、円高の動きも予断を許さない状況です。(ブログ「トヨタで生きる」から)

5. 話は変わって——二つのメーデー集会

5月1日・メーデーの当日、全労連、全労協などが、中央をはじめ、全国各地でメーデー集会をひらいた。

雇用確保や東日本大震災からの復興、脱原発などのスローガンを掲げた全労連などの中央メーデー実行委員会は、東京・代々木公園で「第83回メーデー・中央メーデー集会」には、約2万人(主催者発表)が参加、大黒作治全労連議長が「安定した雇用と社会保障の拡充を図るための運動を強めよう」と呼びかけた。共産党の志位和夫委員長も出席した。

被災地代表として、東京電力福島第1原発事故の警戒区域内にある双葉厚生病院(福島県双葉町)の看護師だった松崎純子さんが「なくしたものは大きすぎる。政府や東電には不信任、怒りしかない」と訴えた、という。

メーデー参加者は、「関西電力大飯原発3、4号機の再稼働反対と脱原発、被災地復興」などを訴えて、デモ行進をした、と新聞は報じていた。

また、愛知県の中央メーデーは、名古屋市中区の白川公園で、愛労連・中立系労組・民主団体・政党など250団体から4千人が参加した。東日本大震災の被災地にさらなる負担を押しつけるとして、消費増税と環太平洋連携協定（TPP）参加への反対や脱原発をスローガンにかかげた。

愛労連議長の樽松佐一（くれまつ・さいち）実行委員長が「働く人の権利を守り、平和と民主主義の日本を目指して頑張ろう」と訴え、参加者が公園周辺をデモ行進したと、「中日新聞」は報じた。

一方、「連合」は、結成（1989年）以来、ゴールデンウィーク真っ只中のメーデー当日を避け、それより前の、いわゆるゴールデンウィーク直前の土曜日などに開催してきた。

ことは、4月28日（土）に、連合の中央メーデー集会がひらかれた。集会には野田首相も参加し、「消費増税を柱とした税と社会保障の一体改革について「政治家自らの身を切る改革と合わせて、与野党の壁を乗り越え、何としても実現させる」と述べ、消費増税法の成立にあためて強い意欲を示した」と、各メディアが報じた。

主催者挨拶に立った、連合・古賀会長は、政権交代後の民主党の政権運営について、「新しい政治の幕開けに期待した熱い思いは残念ながら冷め、失望や落胆に変わった」と批判した、という。「連合」は民主党にとって最大の支持団体だが、組織内の強い不満を代弁した形だ、とみられている。

この中で、古賀氏は「東日本大震災をはじめ国難を目の当たりにしながら、党利や抗争に明け暮れるかのような政治の現状に、国民はうんざりしている。与党も野党も党内での意見の違いを克服し、政策課題を実行してほしい」と注文を付けた、という。

連合・中央メーデーは、「昨年、東日本大震災の被災者への配慮から自粛されたデモも復活した」とマスコミは報じた。

「連合愛知」のメーデー集会は、中央メーデーより1週間前の4月21日（土）、式典と集会をひらいた。集会では、「働くことを軸とする安心社会」をすべての世代で築くことを提唱するため、壮年世代、若年世代、子育て世代、働く者全体のそれぞれの立場から発言をした、という。

「連合愛知」のメーデーは、数年前からデモ行進も行うようになっていた。

（いとう・きんじ / 所 員）



< 紹介 >

猿田正機・杉山直・浅野和也・宗艶蒂・櫻井善行 [著]

『日本におけるトヨタ労働研究』

文真堂、3,800円

第1章 トヨタの非正規雇用

第2章 トヨタの労働時間と生活時間

第3章 トヨタの賃金制度

第4章 トヨタの企業福祉にみる重層的格差構想

第5章 トヨタの生産システムと労働・組織・労使関係

—— トヨタは設立以来の危機に堂立ち向かっていくか。日本経済の凋落はトヨタの後退と期を一にするかのようなのである。「人づくり」を重視してきたトヨタ生産システムはどうなるのか。本書は、トヨタで働く労働者の、戦後の雇用、労働時間、賃金、企業福祉の変遷を辿り、またトヨタの「働き方」の面からトヨタの未来を考えようとするものである。

(本書の帯書きから)

< 雑誌・紀要 > から

『経済』 12年6月号

トヨタの経営戦略と社会的責任 佐々木 昭三

『中京経営研究』 第21巻・第1・2号 (2012年3月)

トヨタ研究と労働組合——労働組合の状況と評価 杉山 直

『東邦学誌』 第39号・第1号 (2010年6月)・

トヨタ生産方式と労働密度 浅野 和也



原発ゼロ・自然エネ・省エネ社会へ！



東電元社員が語る

近森 泰彦

4月22日労働会館にて東京電力OBの鈴木さんに、3.11以降1年間の動きを事実経過を追いながら話してもらいました。概略を報告します。

政府と電力会社は一体となって恥も外聞もなく大飯原発再稼働に向けて動き始めました。あれほどの災害を起こしその原因究明もままならない状況にあるにもかかわらず「安全宣言」を発するとは、まさに狂気の沙汰と言わざるを得ません。

再稼働推進派は「大飯原発の電力供給によって今年の夏は停電を避けることができた」という物語を描いているのでしょうか。原子力発電に頼らなくとも既存の火力発電、企業が持っている自家発電、揚水発電、自然エネルギー発電などを総動員し、なおかつ節電に努めればピークに対応できることは明らかなです。またぞろ安全神話の亡霊があらわれてきていることを厳しく批判すると同時に、新エネルギー基軸への転換こそが社会的責任であると、強調しました。

「超優良企業」東電社員の意識は大きく変わってきています。全社員アンケートによれば「将来不安」が9割に達しました。「過去は変えられないが、未来は変えられる。次の世代を考え誠意をもって信頼回復に努力を」と、トップに抗議を発して退職した管理職。ボランティアとして現地に入った社員は「考えている以上にひどいことを知った。国民の一人として支援をしていきたい」と語っていました。

東京電力労組は、子飼いの身をわきまえて「原子力推進、理解活動を進める」と思考停止状態に陥ったままです。福島原発現場では毎日数千人の労働者が働いています。東電は3次下請け労働者までしか放射線管理を行っていません。

現実には7次、8次下請け労働者が高汚染被曝労働に従事しています。報道写真を見ると白い防護服、全面マスクを着用していて安全のように見えますが高濃度汚染区域ではガンマー線は全く防げません。

東電は被曝労働者を消耗品扱いにしています。経済産業省原子力安全保安院は運動諸団体の追及によって新規作業員の被曝線量上限を250ミリシーベルトから100mSvに戻しました。しかし保安院は一貫して被曝線量引き上げで熟練労働者の欠乏に対応しようとする考えです。

夏に向けて政府・電力の「嘘八百軍団」と良心的国民集団の、エネルギーを巡る関ヶ原の戦いが始まっています。私たちは原子力発電ゼロでも十分乗り切れるという確固とした立場に立っています。学習会に参加した現役の電力労働者は「太陽光発電の

受付をしている。昨年1年間の実績をもとにすれば全国で原発1基分に相当する量だ」と発言しました。

今年7月から自然エネルギー発電を、安定価格で全量電力会社が購入する制度が発足します。流れは確実に変わってきています。

「嘘八百軍団」は停電の脅かしを強めるでしょう。しかし、電力供給がタイトになるのは夏場の晴天・35℃を超える日の14時から15時の1時間のみです。したがってこの時間帯の対策こそ本来国民に呼びかけるべきです。

私たちの考える対策は；

その1、この時間帯の工場の操業を低減しその分を夕方以降に移す。協力に対して電力会社は料金の配慮を行う。

その2、この時間帯の電力供給制限が必要な場合は電気事業法によって通告し実行する。(電気事業法第27条・・経済産業大臣は、電気の需給の調整を行わなければ電気の供給の不足が国民経済および国民生活に悪影響を及ぼし、公共の利益を阻害する恐れがあると認められるときは・・使用電力量の限度、用途若しくは使用を停止すべき日時を定めて・・電気の使用を制限することができる)

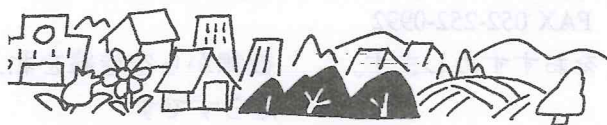
その3、夏季の午後時間帯電気料金を通常に対して相当高額に設定する。

その4、原発設置地域対策に湯水のごとく使っている税金(約5千億円・年)を自然エネルギー発電助成に回す。

その5、この時期に企業は思い切って有給で夏休みをとりいれる。

みなさんいかがでしょうか。電力・政府がその気になればすぐできることばかりです。

(ちかもり・やすひこ／ 当所所員)



行ってみよう近くの穴場・知的好奇心の誘いを受けて 名古屋の「古書展」に行こう！

編集部

この所報を目にする人の多くは、デジタルよりもアナログに依拠していた人が多いと思います。筆者も同様です。近年は、年も取り、長時間の読書は苦手となったものの、活字を追うのは毎日の日課です。でも最近は本を買うことが以前よりは少なくなりました。若い頃、3万円の給料の時代に毎月1万円の書籍費を要していたのは夢のようなことです。(笑)

最近は、ふところが寂しいと言うこともあって、古本屋を利用しますが、その中でもおすすめなのは、名古屋市中区にある古書会館でほぼ毎月行われている「古書展」です。これは古書組合に参加している古本屋の共同企画によるもので、意外と探していた本が手に入ることがあります。

特に筆者がおすすめなのが、店頭に未整理の本を積み上げた100円均一です。これは単行本や雑誌は1冊、新書・文庫・コミックは3冊で100円というものです。もちろん中には、玉石混淆であり、必要ないというのももちろん多いかもしれませんが、中にはいくら探しても見つからなかった絶版本がこの100円コーナーにあったのを発見したときの喜びは、誰にも言うことができません。

今年は、この先以下のような日程で行われます。出来れば初日の金曜日朝10時の開店前からお並びになることをおすすめします。「老いも、若いも」(残念ながら若い人は圧倒的少数です！)集まっています。

予定

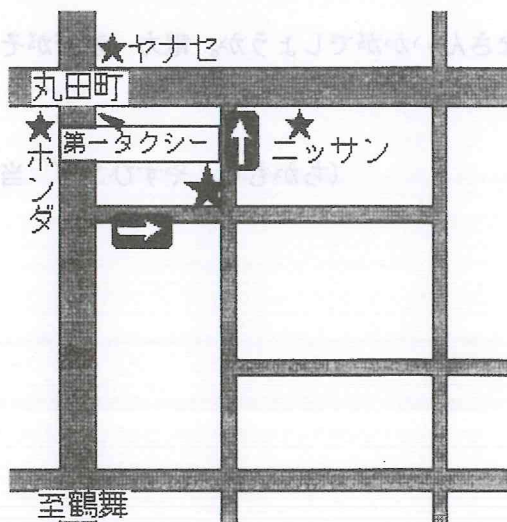
6月8日(金)～6月10日(日)
8月3日(金)～6月5日(日)
8月31日(金)～9月2日(日)
10月5日(金)～10月7日(日)
10月19日(金)～10月21日(日)
11月2日(金)～11月4日(日)
11月30日(金)～12月2日(日)
12月21日(金)～12月23日(日)

いずれも10時から

終了は日曜日は少し早いようです
名古屋古書会館 〒460-0012
愛知県名古屋市中区千代田5-1-12

TEL 052-241-6232 FAX 052-252-0992

鶴舞から歩くことをおすすめします。



鶴舞から空港線を北上、徒歩10分
足らずです

メルマガ購読を

あなたに役立つ情報発信1メルマガ「法学館憲法研究所Journal」案内 編集部

情報社会の進展はめざましいものがあります。インターネットのHP閲覧からメール発信、Twitter、Facebook などなど様々な方法で情報発信・受信が可能です。

もちろん、現在でもアナログ的手法にこだわる人も見えますが、せっかくですから新しい「文明の利器」の活用もおすすめします。比較的初心者でも活用しやすい、メールマガジン(メルマガ)について紹介したいと思います。メルマガとは、作成者・発信者が定期的にメールで情報を流し、読みたい人が購読するようなメールの配信の一形態。MM、メルマガと略されることも多いです。個人あるいは団体が勝手に流す場合もあれば、「まぐまぐ」のようなメール配信業者を通して配信される場合の方が多いです。購読料のほとんどは無料です。有益・無益のものがあり、私たちの知性と判断力が要請されます。

今回紹介するのは、「法学館憲法研究所」 <http://www.jicl.jp/> が発行しているメルマガです。法学館研究所は、現在「護憲」の側から、正確で理性的な論調で私たちに情報発信をしてくれています。先の名古屋市公会堂での憲法集会で講演された、伊藤真氏はこの団体の所長です。読んで損な内容ではありません。おすすめサイトの1つです。

「法学館憲法研究所 Journal」は、法学館憲法研究所が配信する無料のメールマガジンです。法学館憲法研究所のホームページの更新情報を中心に、原則として毎週配信しています。HPの更新情報の概要をつかむために、ご活用ください。申し込みは以下のアドレスからですが、ID やパスワードの設定も要求されますから、よく画面を見て、申し込んでください。

<http://www.jicl.jp/mailma.html>

尚最近号では、【今週の一言】は「低年金高齢者の貧困」、【憲法をめぐる動向】には新たな情報を掲載、【憲法関連書籍・論文情報】として、特集「総批判『社会保障と税の一体革』」と論文『「人権」という理念と日本社会」(紹介文・その2)を掲載、【シネマDE憲法】として、映画「渋谷ブランニューデイズ」を掲載しています。なかなか内容が豊富です。



以下の文章は、「経済科学通信」編集部から依頼寄稿したものです。水野喜志彦氏は、愛知労働問題研究所の会員であり、一部修正の上転載させていただきます。

「追悼！水野喜志彦氏」 生涯労働者研究者の死を悼む

櫻井 善行

はじめに

労働者研究者として基礎研の古くからの理事・所員であった水野喜志彦氏の訃報を耳にしたのは、不覚にも愛知の知人からであった。私と愛知労働問題研究所の関係を知っていた水野氏は、京都に住みながらも「労問研」にも入会していただいたために、年6回発行している「所報」は、数少ない県外の個人会員として同じ事務局メンバーにも記憶に残っていたのだろう。11月になって、その彼が私に「水野さん、亡くなったらしいよ。『新聞』の訃報に載っていたよ」と教えてくれた。あわてて読み返すと、簡単な記述で載っていた。享年85歳、乙訓革新懇の世話人などいくつかの経歴も掲載されていた。働きながら、学び、研究する基礎研の理念を体現した人の死であった。

このとき、まだ基礎研関係のメーリングリストに水野氏の訃報の件についての情報が何も流されていないので、私はあわてて情報確認という意味でその事実だけ情報提供したら、多くの人ははじめて知ったようである。すでに近親者で争議はさせていた。12月末に四十九日があり南禅寺に納骨をするがそのときに「お別れの会」をするという案内を受けたが、私はこの日まで北陸富山に仕事に行かなければならない事情があつて、これも断念した。

水野氏との出会い

実際に水野氏の存在を私が知ったのは、今から6年前のことであった。関西で毎月行われている「職場の人権例会」で、私が「トヨタ自動車内野過労死事件」についての報告を原告の内野博子さんとともにすることがアナウンスされてからのことであった。その報告の少し前に、直接水野さんから電話を頂いたのである。私はまだ所員になったばかりで、電話を聞いて不覚にもどなたかからということがすぐにはわからなかった。ただ話の内容からすると電話の主は基礎研の関係者であり、以前に私が基礎研の研究集会の分科会で報告したことに関心を抱いていたということにはわかった。以前に2度ばかり、私は分科会で報告したことがあった。いずれも労働組合をテーマにしたものであり、先に行ったテーマが「地域労働運動」のことであり、その後「大企業における少数派労働組合」についてであった。水野氏は後者の集会にいて、私の報告をそういえば熱心に聞いていたことが思い起こされる。

その彼が、電話でいったのは、「基礎研」の自由ゼミで、「労働問題」をテーマにした部会を立ち上げたたい、だから「職場の人権」の例会に行くつもりだから、そのときに話をしようというものであった。そのときの電話の声がよく聞き取れな

ったが、京都の乙訓に住んでいるということで不覚にもそのとき名前を聞き取ることができなかった。5年も前の話であった。その彼が水野氏であったが、その日は、水野氏は現れなかった。あとから、やむをえない急用ができたとのことであった。

労働学科設立に関わって

その後、再会することになるのだが、そのときにはすでに「労働学科構想」は膨らみつつあった。その時はじめて氏と込み入った話をするようになった。基礎研との関わりよりも労働運動との関わりについての話の方が多かったように思える。長く全電通（現在のNTTが民営化される前の電電公社の産業別組織であり、労働戦線の右翼的再編の急先鋒であり当時の社会党議員を「選別」推薦していた）組合員であったこと、そして意を介して通信労組の結成に加わったこと、など当時の苦渋に満ちた選択について生々しく語ってくれたことを今も鮮明に覚えている。しかしどうしても聞きたかった4・17スト（1964年）回避についての思いは残念ながら聞くことができなかった。

私はこれまで、自分のライフサイクルを日本の「企業社会研究」をベースに実践と関わってきた。その中で、日本の企業社会を成立させている条件として、民間大企業の企業内労組のユニオンショップの役割をあげてきた。それは従来の協調主義的労使関係の水準ではなく、経営者の意向を忠実に反映させた「経営主導型」の労使関係でありその典型モデルとしてトヨタの労使関係を位置づけてきた。氏が関わってきた全電通の労使関係は当時の労使関係の中では、トヨタの水準ではなかったものの、最近のNTTのリストラと現状情報労連＝NTT労組の対応からすれば大きな差異はないというのが筆者の認識である。

ともあれ、私と水野氏の抱く現在の我が国の民間大企業の労使関係＝ビッグユニオンズムについての共通の認識が年齢にして二回りもある違いがある私と筆者を結びつけるものになったと現在では解釈している。

労働組合運動としての苦悩

苦渋の決断ということがある。過去に大企業職場の民主的変革を志した人にとって、現在も悶々としていることがある。民主主義の原理からすれば、民主主義的な討議と多数決による決定は不可欠である。したがって、その際少数意見についてどう取り扱うかということが課題となる。よくあるのは、民主主義的な討議を経て決定されたものだから、それに従わなければならないという指摘である。組合民主主義は、組織決定が優先される。そうでないと、組織の秩序が守れないし、運動の発展もありえないというものだ。これは一面では真理であり、そのためにスト権投票を確立するし、そのためにはスト破り阻止のためにピケットという戦術だってありうる。しかし、正しい方針が必ずしも多数派になるとはいえない。今までも機関決定という大義名分でとんでもない人を組織推薦したり、誤った方向に持って行こうとしたことはままあった。だから内部で誤った方向に対してどう闘おうかということが問題とされる。今まで「奔流」といわれた潮流は、どんな反動的な組織でも粘り

強く多数派を目指すことが正道だとされてきた。それも一理あろう。ただし条件付きである。それは組織内での民主的な議論が保障されていることが前提となる。その前提が崩れれば、今までの既成概念を固定化することにこだわるべきではないというある方向性を容認するかどうかであった。

こうした主張は分裂を容認固定化するものであるという批判がなされてきた。しかし実際には必ずしもそうでないということ様々な事例が私たちに示してくれている。組織内に於ける多様な行動のあり方につて、水野氏は語っていた。氏がみんなにお薦めした書物に、『ロフトユニオンに挑む』がある。東京都労働委員会の労働者委員であった戸塚章介氏の著書で、フランスの複数組合主義を根拠に、多様な価値観による労働組合運動の必要性を唱えていた。今なおこの書は、少数派組合の側の聖典として活用されているが、「奔流」の中で必ずしも認知されているわけではない。

労働者研究者としての生き様

こうして水野氏の発想、生き様は私のそれとの共通点を見いだした。しかも労働者研究者としての歩みまた同様である。しかし、80 過ぎても元気に頑張っておられる姿にはある意味、いくつかの病気持ちの私にとってすごい励ましにもなった。「オーバー60」になると、人は残りの人生をどう生きるのかということを真剣に考えるようになる。身体が自由に動くのはそんなに先までは望めない。日々自らの体力の限界を感じて、人生の終末への覚悟をおそらく持つようになる。昨年、集会でお会いしたときに、自ら癌であるということを告げ、近々手術するということもお話しされた。十分に覚悟はしていたように思えた。それからしばらくの間、自由ゼミにも顔を出さなくなり心配であったのは事実である。実際に亡くなる直前の労働学科のゼミの帰りに、高田副理事長と会話で「水野さんどうしているかな？」という話題が出たほどである。あのとき、電話でもかけとけばという後悔が今もある。ただこれは結果論でしかない。もう一度、氏の元気な声で、日本の労働組合の行方や可能性を語ってほしかったが、これもかなわぬ夢となってしまった。

最後に

天に逝った水野氏が、今も日本の労働運動の行く末を案じているように思えて仕方ない。美辞麗句で追悼するほど、また輝かしい経歴を紹介するほど水野氏を知り得ているわけではない。しかし過度に誇張することは水野氏がもつとも忌み嫌うことであろう。氏が望むのは現代社会を単に知識として解釈するのではなく、どうしたら変革の方向に持って行くことができるかをめざすことであろう。それが最大の供養であると私は思っている。私たちもまた前に向かっていかななくてはならない。

水野さん、安らかに眠ってください。 合掌

「詠み人知らず」の詩



はしもとさんが生活保護の人たちを攻撃したとき私は声を上げなかった。

生活保護受給者でなかったから。

それに生活保護者の中には不正受給が多いと信じていたから。

大阪センチュリー交響楽団や文楽協会をターゲットにしたとき私はただ見過ごしていた。

コンサートや文楽を見に行っていたわけじゃなかったのだ。

文化は自助努力で、税金を使うべきでないというのはもともとだと思ったから。

はしもとさんが、日の丸、君が代を強制する条例を通したとき、

私は何て馬鹿なことをと思ったが何もしなかった。

自分の職場で強制されるわけではなく、じっと黙っておれば時は過ぎていくと思ったから。

ついで公務員が攻撃された。

私は不安に思ったが、公務員もちよっとは搾られたほうがいいという意見に耳を貸し黙っていた。

民間を見習わなくてはと思ったから。

さらに労働組合が、組合員が執拗に攻撃された。

私は声を上げなかった。自分は組合員でなかったから。

労働組合は規制緩和の最大の妨害者だという、某学者の見解をもともとだと思ったから。

なんかおかしい、不安だという気持ちはあったが、ここは日本なんだし大丈夫だと思い、何もしなかった。

何よりも日本は法治国家であり日本国憲法があるからと思っていた。

はしもとさんが「がれきの撤去が進まないのは、憲法9条のせいだ」とブログで言っているのを聞いたとき、私は悪い冗談だと最初は思っていた。

そしてある日、橋本さんに同意しない教職員を一斉に免職にした。私は抵抗しなかったが積極的に協力もしなかったから、同じように職場を追われた。

私はその時に初めて声を上げたが、私達のために声を上げる人は誰もいなかった。

研 究 所 便 り

☆2012年5月15日以降の活動・集会予定など

- 5月19日（土）ヒロシマの「あの日」から「これから」を語る 保険医協会伏見
- 5月19日 フォーラム・県内の若者、集まれ 大久保智規 椋山女学園大学
- 5月27日（日）中小企業アンケート報告会 刈谷市総合文化センター
- 5月31日～6月11日 あいち2012平和行進
- 6月9日（土）愛知経済懇談会 KKRホテル名古屋
- 6月9日 第8回所員会議10時から 労働会館
- 6月17日（日）愛知学習協50周年周年記念講演 「次世代育成と労働組合」
- 6月23日（土）6・23国民大集会 東京明治公園
- 7月7日（土）大須事件60周年
- 7月7日 第9回所員会議10時～
- 7月16日（祝）脱原発大集会
- 7月22日（日）愛労連定期大会
- 7月29日（日）全労連大会



☆研究所寄贈・購入文献紹介

日本におけるトヨタ労働研究 文真堂 猿田正機ほか

☆今回164号を発行しました。今回多数の方から投稿いただきありがとうございました。あわせて会員の皆様からの感想や積極的な投稿をお待ちしております。
なお、宣伝、組織活動のために複数部数入り用のときは申し出下さい。

☆第13期新年度会費納入のお願いをしています。

★2012年研究集会を9月29日（土）午後に予定しています。
講演内容・講師など依頼中です。

* 「所報」第164号（隔月刊） / 発行日2012年5月15日

* 発行所・編集発行人 愛知労働問題研究所（略称：労問研）

* 〒456-0006 名古屋市熱田区沢下町9-3 労働会館304号

* TEL/FAX(052) 883-6978 Eメールai-romonken@roren.net

* ホームページ <http://www.roren.net/romonken/>

* 研究所会費（年）個人6000円 団体1口・12000円 * 会員の購読料は会費に含む。収入のない大学生・院生割引あり相談下さい。送金先：郵便振替00860-6-80604 愛知労働問題研究所／三菱東京UFJ銀行・金山支店・普通口座1368019

* お願い：13期 2011年度会費納入につきご協力お願いします。

